

## 【資料】

# COVID-19感染拡大に伴う老年看護学における 学内実習の取り組み

— 老年看護学実習Ⅰ（高齢者ケア施設実習）に焦点をあてて —

山本 浩子\*, 中村 もとゑ\*, 木下 真吾\*, 佐々木 かよこ\*, 百田 武司\*

## 【要 旨】

本学の3年次後期に開講している老年看護学実習Ⅰ（高齢者ケア施設実習）は、多様な生活の場で暮らす高齢者の理解と、多職種連携・協働を踏まえた看護の専門性を理解することを目的としている。2020年のCOVID-19の感染拡大により、臨地実習と学内実習を組み合わせた実習に切り替えた。実習目標は臨地実習と同じとし、実習方法を工夫した。学内実習における介護老人保健施設では、受け持ちの高齢者の模擬事例を通して、高齢者の理解と看護の専門性を理解していたが、事例設定の課題から学生の観察力の育成には限界があった。そして、各介護保険サービスや多職種連携・協働の理解については、教員が提示した教材やオンラインで実習指導者に質問を行うことで、臨地実習と同等の学びを得ていた。今後は、学生の主体的な行動、実感から得る学びとなるように、実習指導者と協働し、オンデマンドやオンラインの活用等の工夫も必要であると考え

【キーワード】 老年看護学, 学内実習, COVID-19

## I. はじめに

老年看護学実習は、高齢化による高齢者の生活の場の多様化に伴い、1996年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正で実習単位として独立した。医療機関で治療を受ける高齢者への看護だけではなく、複数の既往疾患を有しながらも長期間にわたり生活する高齢者に対する看護への教育も重視されるようになった。さらに、2007年の看護基礎教育の充実に関する検討会で、老年看護学では、特に生活機能の観点からアセスメントし看護を展開する方法を学ぶ内容とすることが求められた。同時に、臨地実習では多職種チームにおける看護師の役割を学ぶことや、保健医療福祉との連携・協働を通して看護を実践できる能力を養うために、多様な場で実習することが求められた（厚生労働省、2007）。このような背景を踏まえて、本学の老年看護学実習も、高齢者を生活機能の視点から理解し、多様な生活の場として複数の介護保険サービスにおいて実習を行ってきた。

しかしながら、2020年4月、COVID-19の感染拡大に伴い全国に緊急事態宣言が発令され、本学も遠

隔授業を余儀なくされた。同時に、文部科学省、厚生労働省（2020）から、臨地実習は「実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、実状を踏まえ実習に代えて演習または学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を習得することとして差し支えない」ことが通達された。これらの背景を踏まえ、本学も臨地実習と学内実習を同時並行で実施する内容に変更することとなった。

そこで、多様な生活の場で暮らす高齢者の理解と多職種連携・協働を踏まえた看護の役割の理解を実習目的とした「老年看護学実習Ⅰ」について、感染予防を踏まえながら実施した学内実習の取り組みと成果、そして今後の展望について報告する。

なお、本稿は老年看護学実習Ⅰにおける教育の取り組みの報告であり、個人情報に関する記載はないことを前提とする。

## II. 老年看護学実習Ⅰの概要

### 1. 実習の位置づけ

本学の老年看護学実習は、「老年看護学実習Ⅰ（2

\* 日本赤十字広島看護大学

単位)」の後に「老年看護学実習Ⅱ（2単位）」があり、老年看護学実習Ⅰは3年次の後期に開講し、高齢者ケア施設で実習を行っている。また、3年次後期は、老年看護学実習の他に、成人看護学実習Ⅱ、成人看護学実習Ⅲ、小児看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習、在宅看護論実習も同時に開講している。

なお、「老年看護学実習Ⅰ」は科目名であるが、本学で開講している「老年看護学実習Ⅱ」と区別するために、以後も「老年看護学実習Ⅰ」とする。

## 2. 実習目的・実習目標・実習方法

実習目的と実習目標は表1に示す通り、多様なケア環境において、高齢者を生活機能の視点から理解し、多職種との連携・協働のあり方と看護の専門性を理解することである。実習方法として、当該実習は、1クール2週間（全6クール）で、高齢者の多様なケア環境の理解として4つの高齢者ケア施設（介護老人保健施設5施設、介護老人福祉施設2施設、認知症対応型共同生活介護6施設、通所リハビリテーション5施設）で実施している。介護老人保健施設は4日間で受け持ち高齢者への看護を実践

し、その他は各1日の実習である。併せて、2019年度から、高齢者の理解や看護技術の向上をめざして学内での実習日を1日設ける計画をしていた。具体的には、高齢者の価値観や生きがいについて推察することで高齢者理解を深めるために、高齢者の日常生活の様子について知ることができるドキュメンタリー映画の視聴を計画していた。また、高齢者の健康状態に応じて根拠を踏まえた看護援助の実践に繋がるように、臨地実習で頻度の高い看護技術、もしくは実践が困難な看護技術を学び、技術力の向上に繋げられるように計画していた。なお、2020年度に学内実習に切り替えた具体的内容は「学内実習の取り組み」の項で後述する。

## Ⅲ. 学内実習の取り組み

### 1. 学内実習の概要

従来の臨地実習と同等の学びを確保するために、実習目的と実習目標を変えずに目標が達成できるように学内実習を計画した。実施時期は2020年8月から11月、履修生は160名で1クールにつき5グループ（1グループ5～6名）で編成した。学生の実習

表1 老年看護学実習Ⅰにおける実習目的・目標・方法

<b>1. 実習目的</b>
ヒューマンケアリングを基盤とし、多様なケア環境における高齢者を生活機能の視点で理解する。 また、地域包括ケアにおける多職種チームとの連携・協働のあり方と看護の専門性を理解し、高齢者の生活を支える看護を実践できる能力を養う。
<b>2. 実習目標</b>
1) 看護専門職を目指す者として、倫理的な行動をとる。 (1) 高齢者の尊厳を重んじた態度をとる。 (2) 倫理的な視点から改善策について述べる。
2) 生活機能の視点で高齢者の個別性や特徴を理解し、看護援助を実践する。 (1) 高齢者の生きてきた過程を知り、価値観や生きがいについて推察する。 (2) 高齢者と家族との関係が生活機能に与える影響について考察する。 (3) 高齢者の加齢変化や疾患による健康課題が生活機能に与える影響について考察する。 (4) 高齢者の健康状態に応じて、根拠を踏まえた看護援助を実践する。
3) 地域包括ケアに関連する介護保険サービスの現状と多職種との連携・協働のあり方について述べる。 (1) 介護保険サービスの現状と各施設の地域における役割について述べる。 (2) 個々の高齢者に提供されているケアの実際について述べる。 (3) 多職種との連携・協働に関する工夫点と課題について述べる。 (4) 各介護保険サービスにおいて看護師に求められる専門性について述べる。 (5) 適切な報告・連絡・相談を行う。
4) 看護専門職を目指す者として、責任ある行動をとる。 (1) 主体的に実習に取り組む。 (2) 規律を守り、看護学生としてふさわしい態度、身だしなみ、言葉づかいをする。 (3) 実習での体験を踏まえ、高齢者の生活を支える看護について考察し、自己の課題について記述する。
<b>3. 実習方法</b>
1) 実習施設：介護老人保健施設、介護老人福祉施設、認知症対応型共同生活介護、通所リハビリテーション 2) 実習内容：介護老人保健施設は4日間で主に受け持ち高齢者への看護を実践する。 介護老人福祉施設、認知症対応型共同生活介護、通所リハビリテーションは各1日で、複数の高齢者と関わり、ケアの見学・一部実施する。

表2 老年看護学実習Ⅰにおける実習日程と学生配置

実習1週目						実習2週目					
		月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
グループA 学生1 学生2 学生3 学生4 学生5 学生6	オリエンテーション (全体・老健・特養)		通所リハ		GH						
			通所リハ	特養			生きがい*		老健 (自宅：火曜日)		
			GH	通所リハ	特養						
グループB 学生7 学生8 学生9 学生10 学生11 学生12			通所リハ		老健				学びの共有・特養への質疑応答	GH	
				特養						通所リハ	
			GH							GH	
										GH	
グループC 学生13 学生14 学生15 学生16 学生17			老健 (自宅：火・木曜日)			通所リハ	特養	生きがい*		GH	
						特養	GH			GH	
										通所リハ	
										GH	
										GH	
グループD 学生18 学生19 学生20 学生21 学生22 学生23			老健			特養	GH			通所リハ	
							GH			GH	
							通所リハ			GH	
										GH	
										GH	
										GH	
グループE 学生24 学生25 学生26 学生27 学生28			通所リハ		GH	生きがい*		老健 (自宅：火曜日)			
				特養	GH						
					通所リハ						
			GH								

老健: 介護老人保健施設

特養: 介護老人福祉施設

GH: 認知症対応型共同生活介護

通所リハ: 通所リハビリテーション

生きがい: 生きがい、倫理、特養高齢者とのコミュニケーション

配置は従来の実習と同様に、2週間で4つの介護保険サービスについて学べるように編成した(表2)。表2のように学生やグループによって実習日程を統一できなかったのは、COVID-19の感染拡大前に各実習施設と日程調整を行っていたことや、2週間のうち1回は臨地実習が可能となるように学生を配置したためである。また、今回の学内実習は、老年看護学以外の看護学領域の実習も学内で行う必要があったため、大学内の学生の密集を避けるために看護学領域間で調整をして1週間に2回の自宅日を設定した。これらを踏まえて編成した結果、表2の実習日程と学生配置に示す通り、1つのグループにおいて臨地実習と学内実習と自宅実習の組み合わせとなった。

## 2. 学内実習の内容

実習内容は臨地実習と同様に、介護老人保健施設4日間、介護老人福祉施設・認知症対応型共同生活介護・通所リハビリテーション各1日とした。

実習目標の「倫理的な視点から改善策について述べる」を達成するために、高齢者介護施設の食事や排泄などのケア場面における倫理的課題に関して一般公開されている研修動画を視聴覚教材として活用して、カンファレンスを通して学びを共有した。また、実習目標の「高齢者の価値観や生きがいの推察」「高齢者と家族との関係が生活機能に与える影響の

考察」を達成するために、在宅で生活している認知症高齢者とその家族の生活の様子から、認知症高齢者のドキュメンタリー映画を活用した。さらに、高齢者への看護技術の向上をめざして、オムツ交換、車椅子移乗、義歯洗浄等の技術演習を行った(表3)。そして、教材においては、学生のイメージ化が図れるように、介護老人保健施設での受け持ち事例に関する市販の視聴覚教材、一般公開されている施設の紹介、報道特集等の動画や実態調査等の文献を活用した。また、Google Sites™を活用して、模擬の電子カルテシステム(高齢者の基本情報、検温表、経過記録、施設サービス計画書など)を作成し、学内実習における1日のスケジュールや学習資料(文献や動画のURL)を掲示した。自宅での実習の場合は、記録の提出はGoogle Classroom™を活用し、看護ケアの実施やカンファレンス、指導はGoogle Meet™を活用した(表3)。

以下、各実習施設における学内実習の詳細について紹介する。

### 1) 各介護保険サービスの現状について

各実習施設において共通する実習目標に「地域包括ケアに関連する介護保険サービスの現状と多職種との連携・協働のあり方について述べる。」がある。例年、事前学習として実習施設である介護保険サービスについて理解するように課題を提示している

表3 実習内容における学内実習と臨地実習の比較

実習施設	臨地実習	学内実習
介護老人保健施設 (4日)	【1名の受け持ち高齢者への看護】 ①情報収集、アセスメント、看護の方向性の整理、ケースカンファレンスで発表	【1名の受け持ち高齢者への看護】 ①市販の視聴覚教材、模擬電子カルテ (Google Sites™)、高齢者役教員から情報収集、アセスメント、看護の方向性の整理、ケースカンファレンスで発表
	②毎日、朝の情報収集後に報告	②臨地実習と同様
	③対象に必要な看護ケアの見学・実施 回数制限なし	③午前と午後に1回ずつ、看護ケアを実施 高齢者役の教員・学生に対して実施
	【受け持ち高齢者以外への看護】 食事介助、胃瘻からの注入食の実施、看護処置等の見学・実施	【受け持ち高齢者以外への看護】 看護技術の実施 (オムツ交換、車椅子移乗、義歯洗浄等)
介護老人福祉施設 (1日)	【その他】 申し送りやカンファレンスへの参加	【その他】 ①介護老人保健施設と多職種連携に関する資料や動画の視聴 ※多職種連携・協働は2週間を通して学ぶ
	①看護職、介護職、機能訓練指導員、生活相談員へのシャドーイング	①②介護老人福祉施設に関する資料や動画の視聴、施設長・看護職・機能訓練指導員 (理学療法士) への質疑応答 (オンライン)
	②申し送りやカンファレンスへの参加	③事例高齢者への食事介助の実施
	③食事介助・水分補給介助の実施	④介護老人福祉施設の入所者とのコミュニケーション (オンライン、代表学生実施)
認知症対応型共同生活介護 (1日)	④複数の高齢者とのコミュニケーション	①事例認知症高齢者とのコミュニケーション BPSDのある認知症高齢者 (教員演じる) に関わる
	①認知症高齢者とのコミュニケーション	②③認知症対応型共同生活介護に関する資料・動画の視聴
	②ケアの見学・実施 ③カンファレンスへの参加	
通所リハビリテーション (1日)	①複数の利用者とのコミュニケーション	①②通所リハビリテーションに関する資料・動画の視聴
	②各施設の日課に沿って参加 (検温、入浴、食事、リハビリテーション、レクリエーション等)	
学内での実習日 (1日)	①高齢者への看護技術の実施	①介護老人保健施設での実習で実施
		②介護施設の倫理的課題に関する動画の視聴
		③認知症高齢者のドキュメンタリー映画の視聴
自宅での実習日	—	①学生への連絡事項: Google Sites™, Google Classroom™
		②学生への指導: Google Meet™

が、多くの学生は介護老人福祉施設と介護老人保健施設の違い等、各サービスの特徴となる役割の理解が曖昧であり、施設のイメージ化が困難な状況にある。また、介護老人保健施設以外はいずれも1日の実習であり、各サービスの設備や利用している高齢者の生活の様子、ケアの実際等の実状がイメージできない状況で実習目標の達成に向けて、学生が各自で資料を検索・選定することは困難であることが予測された。そのため、学生が各介護保険サービスの現状を踏まえた理解ができるように、実態調査の文献、一般公開されている施設紹介や報道特集の動画を教員が選定し、教材として活用した。そして、本学は、インターネット環境が充分でない学生もあり、

紙媒体での資料を希望する学生がいたことから、関連文献に関しては Google Sites™ に加え、小冊子にした資料を配布した。学生は、個別で教員が提供した資料と動画を見て、各介護保険サービスの役割を理解した後、グループ内でディスカッションを行い、教員は学生の理解度に応じて補足説明を行った。自宅での実習の場合も学内実習と同様に、資料と動画を見て、Google Meet™ を活用してカンファレンスを行った。

## 2) 介護老人保健施設の実習

介護老人保健施設での実習目標には、「生活機能の視点で高齢者の個性や特徴を理解し、看護援助を実践する。」がある。この実習目標を達成するた



めに、受け持ち高齢者1名に対して看護を実践している臨地実習の方法と同等の内容で計画した。

学生は設定した2つの模擬事例「80歳代女性、アルツハイマー型認知症」「70歳代男性、脳梗塞後（片麻痺・半側空間無視）」のうち、1事例を受け持った。

1日目に介護老人保健施設の役割を理解するために、全国老人保健施設協会のホームページを活用して、教員が行う施設のオリエンテーションを受けた。さらに、高齢者の理解に繋げるために、学生は市販の視聴覚教材を視聴しイメージ化を図った。しかしながら、市販の視聴覚教材のみでは、実習目標にある価値観や生きがいを推察するには情報量が不足していたため、教員が生活歴や家族の設定等の個別性に繋がる情報を追加し、Google Sites™を活用して模擬の電子カルテシステムを作成した。学生は各自が所有しているスマートフォンやパソコンから、模擬の電子カルテシステムにアクセスして受け持ち高齢者の情報を収集した。併せて、高齢者と家族役をしている教員とコミュニケーションを図り、情報を得た。なお、教員は看護職、介護職、理学療法士等、学生の希望に応じて複数の役を演じた。また、学生が観察した身体状態（掻破痕、陰部の発赤の有無、浮腫等）に対しては、教員が何を観察しているのかを確認して、口頭で状態を伝えた。

2日目と3日目は、臨地実習と同様に、学生は午前中に受け持ち高齢者の健康状態を把握し、担当教員にアセスメントした内容を報告した。その後で、受け持ち高齢者に必要な看護を午前と午後に1回ずつ実施した。臨地実習において、対象者の状態をアセスメントして報告することは必須であり、高齢者の健康管理として介護老人保健施設における看護職の重要な役割の一つである。しかしながら、病院で治療を受けている高齢者とは異なり、介護老人保健施設の高齢者の健康状態は日々の変化が少ないため、従来の臨地実習でも既往歴や便秘、尿失禁、皮膚症状等の観察に対する学生の意識は高くない。そのため、学内実習でも臨地実習と同様に、健康状態のアセスメントを報告することを実習内容に意識的に組み込み、看護職の役割の理解に繋がれるように指導した。

また、ケアの実践においては、入浴介助や食事介助等を実施するにあたり、施設の環境を設定することが困難であるため、学生は「看護ケア手順書」の記録用紙に環境設定、ケアの手順や注意点・工夫点を記載し、モデル人形（声のみ教員）や、高齢者役の教員に対してケアを実施した。なお、自宅での実習日の場合は、高齢者への説明や促し等の声掛けを



図1 アクティビティケアの実践の様子

中心に実施し、その他は「看護ケア手順書」をもとに指導した。そして、3日目の午後は、アクティビティケア計画書を作成し、3名の学生と教員の計4名の高齢者役に対して、3名の学生が集団へのアクティビティケアを実施した（図1）。

4日目はケースカンファレンスと技術演習を行った。ケースカンファレンスも臨地実習と同様に、カンファレンス資料を印刷せず、要点をおさえたカンファレンス資料をホワイトボード等に掲示してプレゼンテーションし、ディスカッションした。技術演習では、高齢者ケア施設での必要度が高い、義歯洗浄、オムツ交換、車椅子移乗等を中心に行った。

### 3) 介護老人福祉施設の実習

介護老人福祉施設は1日の実習である。前述した各介護保険サービスの現状の理解に向けた教材の提供に加え、実習指導者が作成した施設の設備環境の動画（15分程度）や、各職種の役割に関するオリエンテーションの資料（リハビリや看護に関する静止画含む）または動画（30分程度）を活用して教員が説明した。さらに、介護老人福祉施設の役割を理解するために、Web会議システムであるZoom™を活用して、入所している高齢者とのコミュニケーションと実習指導者への質疑応答の機会を設けた。

オンラインでのコミュニケーションは、1回20分程度とし、代表学生2名が実習指導者のサポートを受けて実施した。代表学生以外は、プロジェクターで映し出された高齢者とのコミュニケーションの様子を同じ講義室で見学した。なお、1対1でのコミュニケーションでは、見学学生もいることから実施学生の緊張が高くなる可能性が高いため2名とした。事前準備として高齢者との会話内容や高齢者に伝わる工夫について検討するように指導した。また、感染予防のためにはマスクを着用する必要があるが、

モニター越しでマスクをした状態での会話は効果的でないことが事前確認でわかったため、代表学生の間に透明の仕切りを準備し、学生はマスクを外して会話をした。また、Zoom™を活用するにあたり、接続や音響等の通信環境の調整が必要であり、施設側によるマイクやスピーカーの設置等、随時、施設側の協力を得て実施した。

また、実習指導者へのオンラインにおける質問は、1回で約30分とし、事前にグループ内で質問内容を検討し、各グループの代表学生が質問した。なお、効率的に時間を活用するために、ある程度の質問内容は事前に実習施設に伝え、施設長、看護職、機能訓練指導員（理学療法士）から回答を得た。

さらに、臨地実習ではほぼ全員が食事介助を実施していたため、学内実習でも同様に食事介助の技術演習を取り入れた。食事介助の実施にあたり、模擬事例として、90歳代の女性、アルツハイマー型認知症、要介護5で誤嚥性肺炎の既往がある高齢者を設定した。設定した場面は、リクライニング車椅子を倒した状態のモデル人形に対してポジショニングをし、傾眠のある模擬事例の高齢者への声掛け等を中心とした食事介助を実施した。実際にモデル人形の口に食事を入れることは困難であるため、介助の方法や誤嚥した場合の対応については「看護ケア手順書」を確認しながら指導した。

#### 4) 認知症対応型共同生活介護の実習

認知症対応型共同生活介護は1日の実習である。臨地実習では複数の認知症高齢者とコミュニケーションを図る機会があり、認知症の症状に応じた関わり方について学んでいる。そこで、学内実習では、認知症の行動・心理症状である Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia（以下 BPSD）として、帰宅願望のある認知症高齢者の模擬事例を設定した。学生は認知症高齢者役の教員に対して約10分間関わった。その後、認知症高齢者役をした教員は学生にフィードバックし、学生は自己のコミュニケーションについて振り返りを行った。

#### 5) 通所リハビリテーションの実習

通所リハビリテーションは1日の実習であり、前述した各介護保険サービスの現状の理解に向けた教材を提示し、カンファレンスで学びを整理した。

#### 6) 高齢者理解と看護技術

臨地実習では、2週間の実習を通して各自が捉えた倫理的課題と改善策について、実習最終日のカンファレンスで発表していた。しかしながら、この度の実習では臨地実習が1日となった学生もあり、学生間で得られる体験に差が生じる可能性が高かつ

た。そのため、一般公開されている高齢者介護施設の倫理的課題に関する研修動画を活用して、各自が捉えた倫理的課題への改善策について、カンファレンスで検討した。

また、高齢者と関わる体験の十分な確保が困難であったため、高齢者の理解に繋がるように認知症高齢者のドキュメンタリー映画を活用した。学生はこの映画から、高齢者の価値観と生きがいを推察した。

なお、高齢者への看護技術の実施については、時間的な問題から、介護老人保健施設での実習最終日の午後に行った。

#### 7) 学びの共有とまとめ

2週目の学内最終日に5グループの全員が集まり、学びの共有を図った。これは、臨地実習の体験日数が学生間で異なっていたため、学びを共有することを目的として行った。予め、教員が各グループに対して発表する実習施設を指定し、代表学生が発表した。事前に担当教員が発表内容をある程度確認し、より具体的な状況が伝わるように指導した。

### 3. 学内実習における感染予防対策

初日のオリエンテーション時に、学内であってもマスク・手洗い・消毒・換気・ソーシャルディスタンス等の基本的な感染予防対策は看護学生の責務であることを強調して指導し、実習期間中に徹底して行った。具体的には、大学指定の書式で継続して使用している「体調管理表」を実習前に必ず確認した。また、グループメンバー間で話し合いを要する場では1～2mの距離を取るよう指導した。特に、コミュニケーションやアクティビティケア等の看護ケアの実践場面では、学生は実践に意識が集中するため感染予防行動に意識が回らない時もあったため、随時、教員がソーシャルディスタンスを保つことを促した。また、高齢者ケア施設の情報共有手段は紙媒体を活用している施設が多いため臨場感のある実習に近づけるためには、ファイリングした紙カルテを作成したほうが効果的と思われたが、複数の学生がカルテを共有することによる感染を予防するために、模擬の電子カルテシステムを作成して、各自のスマートフォンやパソコンからアクセスできるようにした。

## IV. 学内実習の成果

2020年度は、臨地実習と学内実習と自宅からのオンライン実習からなる3つのハイブリッド実習となった。そこで、学内実習の成果として実習目標の達成状況をみると、全ての実習目標において従来の臨地実習と概ね同等の目標達成状況であった。以下、

高齢者の個性や特徴の理解と看護援助の実践、各介護保険サービスの理解と多職種との連携・協働のあり方について考察を述べる。

## 1. 高齢者の個性や特徴の理解と看護援助の実践

学生は、介護老人保健施設で生活をしている模擬事例の高齢者との関わりを通して、高齢者の個性や特徴を理解していた。市販の視聴覚教材を基に、価値観や生きがいや家族背景等の情報を追加することで、ケアや意図的にコミュニケーションを図りながら話を広げ、価値観や生きがい、家族を含めて理解を深められた学生もいた。また、身体的側面として高齢者の健康状態の観察の視点については、臨地実習と同様に教員や実習指導者からの指導により重要性を理解している。特に、学内実習のメリットとして、教員が発問しながら学生の思考を確認しやすい状況にあるため、学生の知識の獲得には繋がっているのではないかと考える。

また、認知症高齢者とのコミュニケーションにおいては、食事以外の場面で、食事摂取量や困っていることを確認したり、排泄以外の場面で排便の有無や排尿回数に関して確認したり、立て続けに質問する姿も見られ、情報を得たい気持ちが先走り、会話に余裕がない様子も見受けられた。しかしながら、学内実習のメリットとして、リアルタイムにコミュニケーション場面を振り返ることができるため、学生は自己の課題に気づきやすく、以後の受け持ち高齢者との関わりに反映することができていた。また、学内実習で関わった認知症高齢者とのコミュニケーションに留まらず、臨地実習での実際の関わりも踏まえて、多様なコミュニケーション方法の必要性について学びを得ていた。

そして、模擬事例からでも、個性を踏まえたケアについて理解していた。受け持ち高齢者に必要なケアとして、移動、食事、排泄、清潔への看護やアクティビティケアの実践を通して、学生は自己の技術の課題を把握することもできていた。また、アクティビティケアでは、複数の高齢者に対して目配りをしながら、高齢者が楽しめる企画を立案し、実施できていた。アクティビティケアの実施は食事や排泄場面よりも、臨場感を持つことができ、学生は実施したケアを振り返りやすかった様子である。これらのことから、模擬事例でも知識的に必要な看護を理解することや、部分的ではあるが技術の学びも可能であると考えられる。

さらに、臨地実習と異なり学生は同じ模擬事例の高齢者を受け持っている。そのため、学内実習のメリットとして、ケースカンファレンスでは活発な

ディスカッションに繋げやすく、学びを深められたグループもあった。一方的な質問形式のカンファレンスではなく、高齢者に対してより良いケアを提供するために、意見を交わすカンファレンスのできたグループもあった。

## 2. 各介護保険サービスの理解と多職種との連携・協働のあり方

各介護保険サービスの現状と多職種連携・協働における看護職の専門性の理解については、イメージ化を図り、現状を捉えやすい資料を選定して提供することで、実習目標の達成状況は従来の臨地実習とほぼ同等であった。

学生は、実習前に各介護保険サービスの役割と看護職の役割について事前学習をしている。そして、臨地実習では教員が発問したり、学生が見学した内容を意味づけられるように助言したりすることで、サービスの理解に繋がっており、これは学内実習でも同様であった。また、看護職の専門性については各サービスの特徴を踏まえ、看護職に求められる役割として行動レベルで考えるように助言を要したが、これは臨地実習と概ね同様の目標達成状況であった。そのため、今回の学内実習で用いた教材でも各介護保険サービスの役割を理解することは可能であったと考える。さらに、多職種との連携・協働のあり方については、臨地実習で見学した実際の連携・協働場面や質問した内容を確認し、必要に応じて事前に提示している関連文献を用いるよう助言することで、連携・協働のあり方について概ね理解できていた。

特に、介護老人福祉施設でのオンラインによる高齢者とのコミュニケーションや実習指導者への質問から、介護老人福祉施設のリアルな現状について学ぶことができていた。実習指導者への質問については、実習施設との事前確認や質問をする時間の調整を行うことで、オンラインでも十分可能であった。しかしながら、介護老人福祉施設の理解の一環として行ったオンラインでの高齢者とのコミュニケーションから、施設に入所している高齢者の特徴や思いを理解するには限界があった。一方で、コミュニケーションの工夫として、歌や景色等の写真等の五感を活用したコミュニケーションの工夫ができた学生もあり、一部の高齢者にとっては他者との交流を図るよい機会となっていた。コミュニケーションには課題があったが、教員のファシリテートにより今後活かせる振り返りを行うことで、高齢者の反応に返答することの重要性、会話を広げることの課題、丁寧すぎる言葉遣いでは伝わりにくい等の工夫点や

改善策を学生間で共有することができた。

## V. 限界および今後の課題と展望

### 1. 学生の主体的行動

各介護保険サービスの現状と多職種連携・協働における看護の専門性の理解については、実習目標の達成状況は臨地実習と概ね同等であったが、学内実習では学生が自ら情報を得て学ぶことには課題があったと考える。教材として活用した資料や動画を教員が提示したことで、学生は提供された情報の範囲内で考える傾向にあった。臨地実習では、学生が自身の五感を通して受動的に得た情報を基に、自ら、もしくは教員の助言を受けながら実習指導者や施設職員に質問したり、ケアの見学を交渉したり、主体的に行動する力が求められる。しかしながら、学内実習では質問や交渉する対象は目の前にいる担当教員のみであり、相談する相手（職種を含む）を選ぶことや、相談のタイミングを図る必要もないため、学生の主体性の育成には限界があると考えられる。学生がより積極的に実習指導者と関わる機会を作るためには、学内実習で取り組んだ介護老人福祉施設でのオンラインによる質疑応答を参考に、様々な実習施設の協力を得て、現場の専門職と関わる機会を設けることも必要であると考えられる。さらに、より臨場感のある学びとなるように、申し送り、多職種カンファレンス、処置場面、食事援助等の多くのシーンを収録したオンデマンド教材の作成（坂井ら、2021）の検討も必要である。

### 2. 臨場感のある看護実践

介護老人保健施設での模擬事例の高齢者への看護においては、教員が高齢者役や家族役、多職種役を演じたため、リアリティに欠けることは否めない。模擬事例の高齢者に変装したり、身体症状を学生が視覚的にアセスメントできるようにしたり、模擬事例の作りこみも課題があった。これは、少しでも臨地実習に近づけるために、1名の教員が複数名の役を演じていたことによる限界でもあった。さらに、浴室での入浴介助やトイレでの排泄介助等、環境設定にも限界があった。そのため、今後は出来るだけ、実習の場に近い環境や物品を準備する等の教材の工夫を検討する必要がある。そして、この度のオンラインでの施設高齢者とのコミュニケーションから、会話以外の歌等の工夫を取り入れることで、高齢者からの肯定的な反応も見られたため、コロナ禍におけるアクティビティケアの実施として、実際の高齢者へのケア提供も期待できるかもしれない。

さらに、高齢者との関わりにおいて、積極的にコ

ミュニケーションを図ることに課題のあった学生もいた。学内実習の場合は、1名の教員が高齢者役を演じているため、同時に6名の学生がコミュニケーションを図ることは不可能となり、必然的に受け持ち高齢者とのコミュニケーション時間が短くなる。学内での代替演習では、目の前に患者がいないため、患者のペースや状態の変化に対する学生の感情の揺れ動きが少ないように感じられた（宮武、井上、小林、磯本、2020）との報告があるように、教員による高齢者役では、学生は反応を汲み取りにくく、もっと会話をしたい、高齢者と関わりたいという感情が湧きにくいかもしれない。また、高齢者の雰囲気やその場の空気感といったシミュレーションでの限界もある。そのため、実年齢に近い高齢者から得られる学びとして、模擬患者の活用の可能性（佐野、中原、野田、北川、2014）も検討する必要があると考える。

### 3. チームケアの実践

加えて、介護老人保健施設実習でのケースカンファレンスについて、活発な意見交換ができたグループがあった。一方で、臨地実習と変わらず、受け持ち高齢者への看護について深めて検討するには課題があるグループもあった。しかしながら、同じ高齢者を受け持っても捉え方や看護の方向性の理解に違いがあることに気づき、その違いをディスカッションすることで、高齢者にとって必要な看護の創造に繋がれることを学べた学生もいた。この体験で得たディスカッションの視点や方法等は、老年看護学以外の実習でも活用することができ、多職種と協働し連携する能力の育成に繋がれるのではないかと考える。

## VI. おわりに

今後も COVID-19を含め、臨地で実習ができない状況が発生する可能性はある。臨地か学内かの両極端ではなく、両方の効果的な要素を取り入れながら、学生の学びを止めない、学ぶ意欲を止めない教育を実習施設と協働しながら検討し、共に学生を育てていく必要があると考える。

## 謝 辞

本学内実習にご協力いただきました全ての方々に心より感謝申し上げます。

## 文 献

厚生労働省（2007）. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/shingi/>



2007/04/dl/s0420-13.pdf [2021/9/26閲覧]  
宮武一江, 井上弘子, 小林匡美, 磯本暁子 (2020).  
成人看護学実習B (急性期・統合実習) での学内  
における臨地実習代替演習内容の報告: 新型コロ  
ナウイルス感染症 (COVID-19) 流行下での取り  
組み. 新見公立大学紀要, 41, 165-172.  
文部科学省, 厚生労働省 (2020). 新型コロナウイ  
ルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学  
校, 養成所及び養成施設等の対応について.  
[https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt\\_  
kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf) [2021/9/26閲覧]

坂井志麻, 熊野奈津美, 太田淳子, 大西知子, 中島  
恵美子, 宮本芳恵 (2021). コロナ禍での老年看護  
学教育のチャレンジ. 老年看護学, 26(1), 41-43.  
佐野望, 中原順子, 野田陽子, 北川公子 (2014).  
模擬患者を活用した高齢者看護学演習に関する文  
献検討. 共立女子大学看護学雑誌, 1, 25-32.

# Shifting On-Campus Practicum Initiatives in Gerontological Nursing Accompanying the Spread of COVID-19

— Practicum in Gerontological Nursing I (Long-Term care) —

Hiroko YAMAMOTO\*, Motoe NAKAMURA\*, Shingo KISHITA\*  
Kayoko SASAKI\*, Takeshi HYAKUTA\*

## Abstract:

The aim of the gerontological nursing practicum (long-term care) program conducted in a student's second semester of the 3rd year at our college is to cultivate an understanding of the elderly living in various settings and the specialized nature of nursing that takes into consideration interprofessional work. Due to the spread of COVID-19 in 2020, the practicum program was modified to incorporate both on-site and on-campus practicums. As practicum objectives remained the same as those for on-site practicums, alternative practicum methods were devised accordingly. For on-campus practicums, an understanding of the specialized nature of nursing and the elderly was achieved through elderly resident simulations at geriatric health services facilities. However, there were limitations to observational skill training of students, due to challenges that emerged in the simulated case settings. With regard to student understanding of long-term care insurance service and interprofessional work, questions from on-line practicum instructors seemed to be as effective as on-site practicums, the latter of which was based on study materials provided by nursing teachers in meeting the learning objectives. This highlights the need to devise ways to incorporate on-demand and on-line resources and collaborate with practicum instructors so that learning is achieved through the independent actions of students and through reflection on their subjective experiences.

## Keywords:

gerontological nursing, on-campus practicum, COVID-19

---

\* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing